

改革開放以降の中国における育児援助 ネットワークの変容に関する一考察

— 1980年以降生まれの「一人っ子親」家族に焦点を当てて —

朱 奕 雷

はじめに

本研究の目的は、改革開放⁽¹⁾以降の変容しつつある中国社会では、育児援助ネットワークはどのように変貌を遂げているのかを検証することである。そのため、一人っ子政策⁽²⁾が実施されていた1980年以降に生まれ、現在親になっている「一人っ子」たちに焦点を当て、「一人っ子親⁽³⁾」家族では、どのような子育て支援を求めているのかを検証することを試みる。

伝統的な中国社会では、地域や親族からの育児サポートが広範的に存在しているとよく指摘されている。その背景として、中国家族の特徴である家族・親族関係の緊密さ⁽⁴⁾がよく挙げられる。中国の家族には互助的な関係性があるため、子どものケアについて、家族・親族が積極的に関与していると考えられる。

1970年代末から、改革開放政策が始まり、それにより、中国の経済体制は計画経済⁽⁵⁾から社会主義市場経済⁽⁶⁾へと移行した。経済体制の変化は中国社会の急速的な都市化を推進してきた。また、1970年代末から実施されていた一人っ子政策により、中国社会の少子化も進んだ。この一連的な社会変動は中国家族にも影響を及ぼし、改革開放以降の中国では、家族規模が縮小し続けている。また、世代間関係について、経済体制の変化により家族内における個人主義の傾向が強くなり、現代中国家族では、家族内の権力構造が年長者である祖父母世代から個人主義の強い親世代に転移していると見られる。

そこで、本稿では1980年代から本格化する社会変動は中国社会の子育て支援ネットワークにどのような影響を与えたのか。都市化、少子化が進んでいる中国社会では、育児援助の親族ネットワークが存続しているのか。これらの問いを明らかにするために、1980年以降生まれの「一人っ子親」家族に焦点を当て、アンケート調査とインタビュー調査を併用することで、改革開放以降の家族変動を育児支援ネットワークの変容に着目して検証することを試みる。

1. 先行研究と理論的枠組み

(1) 中国における育児援助ネットワークの構造

落合ら(2004)が実施した中国、タイ、シンガポール、台湾、韓国、日本におけるアジア諸国の育

育児援助ネットワークに関する実証研究においては、中国の育児援助ネットワークは柔軟な夫婦間の役割分担と親族ネットワークによるインフォーマルな援助、および育児休業や保育園などのフォーマルな援助の双方によって支えられていると指摘されている⁽⁷⁾。また、中国の育児援助ネットワークの組み合わせ方について、「①親と他の親族の援助と保育園の併用、②主に保育園の利用、③その他に分類している。その中で、第一に期待される援助は妻方/夫方いずれにせよ祖父母による援助であり、これが得られない場合には、保育園などの施設利用などに頼る⁽⁸⁾」としている。換言すれば、中国の育児支援ネットワークの特徴は、インフォーマルな援助とフォーマルな援助の双方によって支えられているほか、子育ての担い手が親だけではなく、他の親族（特に祖父母）も子育てに参加することであると言える。

(2) 改革開放以降の社会変動と家族変動

① 改革開放以降の家族構成、世代間関係の変容に関する研究

石原ら（2013）は2006年から2007年にかけて中国の4都市である成都、上海、大連、広西チワン族自治区南寧で標本抽出調査を行った。調査した結果、中国家族の世代構成の変化について、産業の高度化が進んだ沿海部では世代規模の縮小化と単純化が進んでいると指摘している⁽⁹⁾。

また、親子関係について、田淵（2013）によると、中国では若いライフステージにある有配偶子が親と同居しやすい傾向にあると指摘している。そしてこの傾向は「孫の世話をめぐって親からの支援を受けるニーズが存在すると解釈できることを明らかにしている⁽¹⁰⁾」としている。また、中国の親子関係には親と子の相互援助が必要不可欠であり、よって親子間のコミュニケーションも緊密であると考えられる。さらに親との同居傾向について、田淵（2013）は、親が単身の場合、都市部でも親世代のニーズに対応した同居が選択されている傾向にあることが明らかにされている⁽¹¹⁾。

そのため、改革開放以降の中国では、一人っ子政策の実施および都市化の進展により、家族の規模が縮小する傾向が見られる。しかし、相互扶助的な親子関係も維持しているため、子育て支援を求めることで親と一時的同居や近居する傾向もあると明らかにされている。

② 「一人っ子親」家族に関する研究

「一人っ子親」家族の構造について、包・陳（2005）は、「一人っ子親」家族の構造は、「三世同居」の傾向があり、特に都市部において「三世同居」家族が今後さらに増えていく可能性があると主張している⁽¹²⁾。そこで、「一人っ子親」家族では、「三世同居」により祖父母からの育児支援が求めやすいと推測できる。

また、「一人っ子親」家族の世代間関係について、肖（2014）によると、現代中国家族は、家族ネットワークのなかで個人主義の傾向が強くなり、特に都市部における「一人っ子親」世代は、自己主張が強く家族のイベントや子どもの養育・教育の決定権を持っている。一方、祖父母世代は、緊密で良好な世代間関係を維持するために、家庭の決定にはほとんど干渉せず、彼らの息子・娘である親世

代が決定権を持てるように、自分の主張を控えているのである⁽¹³⁾。つまり、伝統的な中国家族では、年長者が絶対的な権威を持ち家族の事情を決定することと比べ、現代中国家族では、家庭内の権力構造が年長者の祖父母世代から個人主義が強い親世代に転移していると見られる。

③ 改革開放以降の育児環境の変容に関する研究

中国では、改革開放以前の1980年代までに育児の施設が非常に充実していたと考えられる。一見(2010)は、1980年代までの時点で中国では、0～6歳まで子どもの保育・教育施設がほぼ整備されていたと述べている⁽¹⁴⁾。0～3歳児は、衛生部門管轄の「託児所」が保育を行う。3～6歳児は「幼稚園」(中国語では幼児園)が保育を行う。「託児所」と「幼稚園」を合わせた育児施設は「託幼」機関または「託幼」事業と呼ばれており、親の就労をバックアップする福利厚生機能と子どもの保育機能の双方を兼ね備えている。このような「集団保育」という託幼機関は親の就労ニーズに合わせて、全日制、寄宿制、半日制、季節制といったさまざまな形態をとることが可能である。中でも「全託」と呼ばれる寄宿制の育児施設の設立は、社会主義国家としての中国に特有な保育制度であるといえる⁽¹⁵⁾。

しかし、改革開放以降、特に1997年から国営企業の改革⁽¹⁶⁾が行われて以来、国営企業が急速に減少し、そして市場経済の進展に伴って育児の形式と施設が多様化し、こうした「集団保育」の形をとる託児機関も次第に減っていった⁽¹⁷⁾。

1979年から実施された一人っ子政策により、一生涯にわたって子どもを1人しか生まない家族が増えてきた。この状況を背景として、子どもを家庭の中で手厚く保育することが望まれており、両親だけでなく、祖父母も積極的に育児に参加しているケースが多くなってきている。陳は、「中国における一人っ子政策の実施、ベビーシッターの普及、祖母祖父からの育児協力が得られるなどの理由で、家庭保育の場合が増加した⁽¹⁸⁾。」と述べている。

以上の先行研究から、1980年代までの中国では、家族・親族からのインフォーマルな育児援助と幼稚園、託児所などといったフォーマルな育児援助の双方によって支えられていたと考えられる。しかし、1980年代以降の中国では、一人っ子政策と1990年代に行われていた国営企業改革により、幼稚園や託児所などの託児施設の数が顕著的に減少しており、育児援助について、祖父母をはじめとした親族ネットワークがさらに充実していると見られる。

以上より、従来の研究では、改革開放以降の中国における家族構成、世代間関係に関する研究が蓄積されているが、育児支援ネットワークに関する研究がほとんどなされていないといえる。また、「一人っ子親」家族では、世代同居の比率がより高いと先行研究から明らかにされていたが、祖父母との同居または近居は、いかに育児支援ネットワークに影響を与えたのかはまだ解明されていない。調査方法から見ると、従来の研究では、定量的な実証調査に偏重しているが、定性的調査でマイクロレベルの研究は稀であると指摘できる。また、調査対象から見ると、親世代向けの研究は多いが、世代間の研究は少ないと指摘できる。

そこで、本研究では、従来の調査方法としてはとられてこなかった定量調査と定性調査2種を併用

することで、「一人っ子親」家族における育児援助ネットワークの特徴を全体的に捉えることを試みる。また、インタビュー調査の対象者を一家族の祖・親・子の三世代とすることで、世代間の研究を通じて、「一人っ子親」家族において、育児支援の親族ネットワークが充実している要因を明らかにすることができると思う。

(3) 本研究の理論的枠組み

本研究では、関井ら（1991）が提起した育児援助ネットワークの構造を理論的枠組みとして論を進めたい。関井ら（1991）によると、育児援助システムは、制度や施策といったフォーマルな援助システムと親族や近隣・地域といったインフォーマルな援助システムに分けて考えられる。フォーマルな援助システムは、①学校教育や保険・医療機関における子どもの知的・身体的発達を保障する社会的専門援助機関、②親の雇用労働に対応して、労働の場における親への出産・養育保障や、家族生活保障（住宅・所得保障・育児手当等）といった産育の社会的援助、③保育所や保育サービスである。また、インフォーマルな援助システムは、親族や近隣、地域の人による育児援助である⁽¹⁹⁾。

そこで、本研究では、関井（1991）が提起した育児支援ネットワークの構造を理論的枠組みとし、1980年以降生まれの「一人っ子親」家族の育児援助ネットワークの構造を考察することを試みる。

2. 調査概要

本研究は、アンケート調査とインタビュー調査を併用することで調査を行った。

現代中国家族の育児支援ネットワークの構造を明らかにするために、筆者は2019年8月に安徽省蕪湖市⁽²⁰⁾の幼稚園生と小中学校生の子を持つ親を対象としてアンケート調査を行った。有効サンプル数は343である。

また、アンケート調査から「非一人っ子親」家族と比べ、「一人っ子親」家族における親族ネットワークがかなり充実していると確認できたため、「一人っ子親」家族に焦点を当て、祖父母をはじめとした親族からの育児支援の実態を明らかにすることを試みる。そこで、アンケート調査の回答者から12の家族を抽出し、祖・親・孫という三世代にわたり半構造化インタビューを行った。インタビューの内容は協力者の同意を得て録音し、文字化した。また、協力者のプライバシーを保護するために、各家族を仮名で表記する。

3. 結果分析

(1) 改革開放以降の家族における育児支援ネットワークの構造

「子どもの世話をする人」についての調査項目を分析した結果、表1のように、育児に関わる人は多様であることが確認できる。「子どもと関わる人」別に見ると、全ての項目を通じて最もよく子どもの世話をする人は子どもの親（表中では自分・配偶者、以下略）であり、次いで祖父母（表中では自分の母・自分の父・配偶者の母・配偶者の父、以下略）であることが明らかになった。また、親や

表1 よくお子さんの世話をする人

（%）

	自分	配偶者	自分の母	自分の父	配偶者の母	配偶者の父	ベビーシッター	学校／幼稚園の先生	その他
おむつ交換	91	52.8	36.7	4.7	26	1.8	1.5	0	1.2
起床、就寝時の世話	91.8	49.3	32.7	5	19.8	3.8	1.2	0.3	0.6
食事の世話	79	41.1	35.6	10	25.7	4.7	2	0.9	0.6
平日昼間の世話（放課後の世話）	79.3	43.7	28.9	12.9	17.2	7.3	1.5	1.5	2
寝かしつけ、絵本読み	89.8	47.2	16	2.3	7.9	1.8	0.9	0.3	0.6
託児所／幼稚園／学校／習い事の送迎	80.8	46.9	22.2	17.2	15.5	11.1	1.5	1.2	0.9
病気時の世話	97.4	60.6	28	7	15.2	3.2	0.6	0.6	0
入浴の世話	86.6	47.5	26	3.8	17.5	2.6	0.9	0.3	1.5
勉強を教える	94.2	61.5	10	5	2.9	3.2	0.6	2.6	0.9
一緒に遊ぶ	92.4	71.4	13.1	8.5	10.2	4.1	1.2	0.3	1.2
休日に外出して遊ぶ	97.1	82.5	9	4.7	4.1	0.3	0.6	0	1.8

祖父母などの親族の他、ベビーシッターもある程度活用されている様子が見受けられる。この点も本調査から得られた知見である。

また、「育児に援助してくれる人」についての調査項目を分析した結果、表2のように、「子どもの親（表中では自分・配偶者、以下略）が育児において困った際に援助してくれる人」も多様に存在すると確認できる。表2から分かるように、子どもの親が困ったときに、1番よく援助してくれる人は「配偶者」であるが、2番目3番目によく援助してくれる人は祖父母（表中では自分の親・配偶者の親、以下略）である。また、祖父母が育児に援助してくれる項目については、「子どもの病気の助言」や子どもの親がいないときに子どもの世話をするとといった情緒的、手段的サポートのほか、「子育て費用の援助」といった経済的なサポートをする存在でもあることが分かった。

(2) 「一人っ子親」家族の育児支援ネットワークの特徴

① 祖父母と同居、近居する比率が高い

祖父母との住居距離についての調査項目を分析した結果、表3が示すように、「一人っ子親」は自分の親と同居する割合は20.6%であり、同じ敷地内と歩いて行ける距離の割合は合計31.3%であった。一方、「非一人っ子親」は自分の親と同居する割合は8.7%であり、同じ敷地内と歩いて行ける距離の割合は合計18.7%であった。つまり、「非一人っ子親」と比べ、「一人っ子親」は祖父母と同居、近居する割合が明らかに高いと確認できる。祖父母と同居、近居により、祖父母からの育児支援がより求めやすいと予測できる。

表2 育児に支援してくれる人

（%）

	自分	配偶者	自分の親	配偶者の親	その他の親族	ベビーシッター	友達	学校の先生	その他
子どもの病気の助言	49	69.1	47.8	21.6	6.7	0.3	16.6	2	4.1
子どもが言うことを聞かない時の助言	41.7	72.6	35.3	14.3	6.4	0.3	21.3	19	2.6
子育てのぐちを聞いてくれる	28.9	69.7	36.4	9.9	6.7	0.3	36.2	2.6	2.6
子育て費用を援助	70.3	83.4	26	12.2	2.9	0	1.8	0	1.2
あなた／配偶者の外出時（何時間）の世話	23.9	26.5	48.4	42.6	11.4	2.3	7.9	1.5	1.2
あなた／配偶者の数日間（二三日から一週間）の外出中の世話	25.7	26.2	52.5	44.3	9	1.8	2.3	1.2	1.2
あなた／配偶者の長期間の不在中の世話	27.1	24.2	56	45	7.3	1.5	1.5	0.9	2
あなた／配偶者の勤務時の世話	25.7	20.7	48.4	44.6	7.6	3.2	2.6	2.3	2
あなた／配偶者が病気時の子どもの世話	29.2	26.8	53.4	43.2	8.2	1.5	2.6	1.5	1.2
就学前の子どもの学校等に対する助言	42.3	65.9	24.8	12.5	9.3	0.3	27.7	16.9	1.5

表3 「一人っ子親」と「非一人っ子親」は自分の親との住居距離（%）

	一人っ子親	非一人っ子親
同居	20.6	8.7
同じ敷地内	2.9	8.3
歩いて行ける距離	28.4	10.4
車で60分以内	36.3	30.7
日帰りで往復できる	5.9	17.8
日帰りで往復できない	3.9	18.7
その他	2	5.4

② 親族ネットワークがより充実している

インタビュー調査では、「非一人っ子親」家族と比べ、「一人っ子親」家族では親族ネットワークがより充実していると指摘できる。例えば、黄園の母は以下のように述べる。

……彼女（筆者注：黄園）の放課後、夫の両親は彼女を学校に迎えに行く。もし私に時間があつたら、私が学校に迎えに行く。土日も同じ。食べるのは全部ここ（筆者注：黄園の母方の祖父母の家）である。私の勤務時間は柔軟で、勤務地は彼女の学校と近いので。忙しくなければ、私は彼女を迎えに行く。私たちは自分でご飯を作らない。（黄園の母）

黄園の母が言ったように、黄さん家族では、孫の学校の出迎えは父方の祖父母で、食事の準備は母方の祖父母である。そこで、黄さん家族では、子どもの親だけではなく、父方と母方両方の祖父母も積極的に子育て支援を行うと見られる。

今回のインタビュー対象家族では、黄さん家族のように、父方と母方両方の祖父母が子育て支援を行う家族がほとんどである。しかし、祖父母のほか、その他の親族も積極的子育て支援をしている家族もある。馬燕家族では、祖父母だけではなく、叔母も子育て支援を行っている。馬燕の母は、以下のように述べる。

学期中には、長女（筆者注：馬燕）を朝の学校に送るのは叔母がする。午前の放課時には私の母か父が彼女を学校に迎えに行く。昼ご飯を食べさせたり、昼寝をさせたりしてから、午後の学校に送る。（馬燕の母）

馬さんの母が言ったように、馬燕さんの朝の学校の送迎は叔母が担っている。その一方、午前と午後の学校の送迎は祖父母が担っている。そこから見ると、馬さん家族では、祖父母からの支援だけではなく、そのほかの親族も子育て支援を行うと見られる。

以上、①②の分析から、「一人っ子親」家族では、「非一人っ子親」家族と比べ、祖父母との同居、近居により、祖父母からの育児支援が求めやすいこと、そして、父方と母方の祖父母がともに子育て支援を行うケースが多く見られ、時にはその他の親族も子育て支援を行うこと、これらの要因によって「一人っ子親」家族では、子育て支援の親族ネットワークがより充実しているということが確認できる。

(3) 親族ネットワークが充実している理由

「一人っ子親」家族において、育児援助の親族ネットワークがなぜ充実しているのかについて、インタビュー調査から①「一人っ子親」世代からの需要、②祖父母世代からの要望、③教育戦略としての祖父母の子育て支援の3つの側面から分析することができる。

①「一人っ子親」世代からの需要

中国女性の就業率には、出産・育児期においても働き続けていて高い就業率を維持しているという特徴がある⁽²¹⁾。中国社会における女性の就業率が高い原因として、男女平等の基本国策と社会主義建設の需要のほか、中国社会では、「専業主母」という規範がないことも挙げられる。出産の後すぐ職場に戻り、仕事と育児のバランスがよく取れないため、祖父母をはじめとした親族からの育児支援を求めるということが最も挙げられる理由である。例えば陳華家族では、陳さんの母は祖父母の育児支援を求める理由を「育児と仕事のバランスが取りにくいからである。専業主婦にならないと」と語った。また、専業主婦にならない理由について、「今の仕事はそんなに多くお金を稼げないが、自分の

生活は充実させられると思う。もし専業主婦になったら、毎日家にいるので、社会との繋がりがなくなるね。（中略）中国では、『専業主婦』は理解されないでしょう。」と陳さんの母は述べた。

このように、「専業主母」という社会規範が存在していない中国では、多くの女性は仕事しながら育児をしている。共働きで育児と仕事のバランスが取りにくいいため、結果として祖父母からの育児支援を求めることになるという状況が背景にあると考えられる。

また、インタビュー調査を通じて、「一人っ子親」世代は生活面において親への依存度が高いという点が明らかになった。劉亭家族では、劉さんの母は祖父母による育児支援を求める理由を「私たち（筆者注：私と夫）はずっと彼ら（筆者注：祖父母）の世話の下で生活しているからである。私たち一人っ子はずっと彼ら（筆者注：祖父母）と同じ都市に住んでいる。だから、全く関わりはないのは無理だ。」と述べる。また、孫伊家族では、孫さんの母は「私は一人っ子だから、家事をやるのが上手ではない。夫も長期的に外で働いているので、私1人で子どもを育てるのは無理。うん、（子育てする）能力がない。」と語った。インタビュー調査では、世代同居の場合には、祖父母は孫世代の世話をすることで、一人っ子親世代の世話もすることが見られた一方、たとえ別居や近居でも、祖父母の子育て支援は、親世代と孫世代両方に及ぶことが明らかとなった。これは孫伊さんの母が述べたように、1980年代以降生まれた第一世代の一人っ子たちは、小さい頃から親による過度な愛情の下で育てられたため、「家事をやること」などの生活能力が低下していると指摘できる。これを背景として、第一世代の一人っ子たちは、成人して子どもを産んでからも、生活面では祖父母に対する依存度が高く、子育て支援を求めることで、子どもの世話を求めると同時に、自分の世話までも求めているのである。

② 祖父母世代からの要望

祖父母が熱心に子育て支援をする理由について、最もよく挙げられる理由は、「血縁の継続、家族団らん」の意識の強さであると考えられる。例えば張宇家族では、祖母が一人っ子である娘と孫の世話をすることについて、「私は喜んで彼ら（筆者注：孫と娘）の世話をしている。彼らと別れるのがつらい。彼らのことを捨ててはいけない。何日か会えなければ早く会いたいと思う。」と語った。また、趙強家族では、趙さんの祖母は「孫育ては幸せだ。家族愛が感じられるね。」と述べている。これらの発言から、祖父母世代が積極的に子育て支援をする理由は、家族愛を感じたく、一家族団らんを味わいたいからであるといえる。これは、血縁の継続を重視する中国家族の伝統であると考えられる。

また、祖父母世代は「一人っ子親」を守る意識が強いことで、積極的に子育て支援を行うことがインタビュー調査から明らかになった。曾江家族では、祖母は曾さんの母が妊娠した時から実家から蕪湖市に移住し、娘の世話を始めた。孫の曾さんが生まれてからは続けて孫の世話をしている。娘と孫の世話をする理由について、曾さんの祖母は「娘を可愛がるからである。娘は妊娠しながら仕事をしていたので、とても辛かったのである。」と語った。また、日常生活を支援するだけでなく、自ら経済的支援を行う祖父母というものも存在する。劉亭家族では、劉さんの母は「祖父母がいつも私

たちに経済的支援をしてくれる」と語った。それはなぜかという、「私と夫ともに一人っ子で、しかも私たちは1人の娘しか産んでいないので、（筆者注：祖父母は私たちが可愛がるから）私たちは祖父母から経済的な支援を求めないが、祖父母自ら経済的な援助をしてくれるよ。彼らのできる限りで。」と劉さんの母は語った。

このような支援行動は、祖父母たちはどのように認識しているのか。孫伊さんの祖母は子どもと孫の世話をすることについて、「当たり前」のことだと認識し、「自分の奉仕」、「自分は能力がある」、「自分は価値がある存在」であると理解している。

以上より、「非一人っ子親」と比べ、「一人っ子親」は彼らの両親にとっては、生涯を通じて生まれた唯一の子どもであるため、子どもが成人になっても守り続けるという意識が強いといえる。その守るといえるのは、「一人っ子親」の生活上の援助（例えば、「一人っ子親」の日常生活の世話、孫の子育て支援）を行うだけでなく、経済的に支援を行うことも少なくない。祖父母世代は、子どもを育てる支援は子世代に対する無条件の奉仕だと認識しており、自分は価値がある存在だと子育て支援行動を肯定的に受け入れることがインタビュー調査から明らかとなった。

③ 教育戦略としての祖父母の子育て支援

祖父母による子育て支援の内容を見ると、子どもの日常的世話をするだけでなく、早期教育を行う場合も見られる。例えば孫伊さんの祖母は孫の孫伊さんが幼稚園に通う前の段階で既に文字と数字を教え始めていた。文字の教え方について、孫さんの祖母は「おじいさんは家で絵本の読み聞かせをした。絵本の読み聞かせを通して、次第に簡単な漢字を教え始めた。」と語った。また、孫に早期教育を行った理由について、孫さんの祖父は「幼児期に、子どもに文字や文化に慣れ親しませることが大切であると我々は考える。早期教育で勉強や文化に対する興味や関心を持つようになると、小学校に入った後、勉強が好きになれると思う。」と語った。孫さんの祖父母のように、自らの方法で孫に早期教育を行った祖父母はほかにも数名いる。陳華家族では、祖母は孫の陳さんが生後7,8ヶ月という早い段階で植物を教え始めた。王元家族では、祖父は孫の王さんが小学校3年生になるまでに、中国の伝統的な教材である『弟子規⁽²²⁾』を教えていた。

祖父母が積極的に孫に早期教育を行っていることは、中国社会の「教育熱」が親世代に対してだけでなく、祖父母世代に対しても影響を与えていることの表れである。このような祖父母による子育て支援は、子どもの養育・教育を最重要視する中国家族の教育戦略の一環として捉えることができる。

終わりに

改革開放以降の中国では、少子化と都市化の進行により、育児援助システムにおいて祖父母をはじめとした親族ネットワークの充実化が見受けられる。特に1980年以降生まれの「一人っ子親」家族では、祖父母だけではなく、その他の親族も育児支援を行う場合が少なくないのである。「一人っ子

親」家族では、祖父母と同居、近居する比率が比較的高いため、同居、近居により祖父母からの育児支援が求めやすいと考えられる。「一人っ子親」家族における育児支援の親族ネットワークが充実している理由について、①「一人っ子親」世代からの需要、②祖父母世代からの要望、③教育戦略としての祖父母の子育て支援という3つの側面から分析・検討を行った。

中国家族では、昔から祖父母の子育て支援が存続していると見られる。これまでの老親世代は、相互扶助的な親子関係により、孫の子育て支援をすることで、親となった子世代から経済的な援助を受けていたと考えられる。しかし、現代中国では、医療保障と年金制度の普及により、特に都市部では子育て支援によって子世代から経済的な援助を受ける必要の無い高齢者が増えている。子世代から経済的な援助を受けるのではなく、逆に子世代に対する経済的サポートを行う祖父母さえある。そこで、今日の中国家族に見られる、「子世代から経済的援助を求めないが、子育て支援も積極的に行う祖父母」という存在の背景には何があるのだろうか。この課題を解明するために、今後は現代中国家族の親子関係について、さらに研究を進める必要があると考える。

注(1) 1978年から開始された中国国内体制の改革および対外開放政策である。大躍進政策と文化大革命で疲弊した経済を立て直すため、「四つの近代化」を掲げ、市場経済体制への移行を試みる。

(2) 一人っ子政策は、中華人民共和国における人口政策である。とりわけ1979年から2015年まで導入された厳格な人口削減策、計画生育政策（中国語：计划生育政策）を指し、一組の夫婦につき子どもを一人に制限するものであった。2016年からは一組の夫婦につき子ども二人に緩和されている。

(3) 「一人っ子親」家族（中国語：「独生子女家庭」）は、夫婦とも一人っ子あるいは夫婦いずれかが一人っ子の家族と定義している。夫婦とも兄弟がいる場合は、「非一人っ子親」家族（中国語：「非独生子女家庭」）と定義している。

(4) 費孝通, 1947, 『生育制度』商務印書館, 81頁

(5) 中央集権的な政治体制のもと、労働以外の資源を政府が所有し、政府の策定した計画に従い資源配分を行う経済体制である。

(6) 社会主義市場経済とは、中華人民共和国が導入した経済体制である。市場経済を通じて社会主義を実現すると規定された、経済の活性化を図るという体制を指す。

(7) 落合恵美子, 山根真理他, 2004, 「変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー—中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本—」『教育学研究』71(4), 日本教育学会, 385頁

(8) 落合, 同上論文, 384頁

(9) 石原邦雄, 2013, 「家族の規模と構成」石原邦雄・青柳涼子・田淵六郎編『現代中国家族の多面性』, 弘文堂, 27-36頁

(10) 田淵六郎, 2013, 「居住関係」石原邦雄・青柳涼子・田淵六郎編『現代中国家族の多面性』, 弘文堂, 40頁

(11) 田淵, 同上論文, 37-43頁

(12) 包蕾萍, 陈建强, 2005, 「中国“独生子女”婚育模式初探: 以上海为例」『人口研究』29(4), 62-72頁

(13) 肖索未, 2014, 「“严母慈祖”: 儿童抚育中的代际合作与权力关系」『社会学研究』2014(06), 168頁

(14) 一見真理子, 2010, 「中国における早期の子育て事情「一人っ子」「市場経済化」「早期からの教育」の各政策のもとで」『教育と医学』58(6), 502-509頁

(15) 一見, 同上論文, 504頁

(16) 中国では、1980年代から国営企業に乗り出し、90年代前半には現代企業制度の導入、後半には国有経済の戦略的再編などを通じて改革を推進してきた。これらの改革は、国有企業における「政企分開」（行政と企業

の分離)、「両権分離」(所有権と経営権の分離)、先進資本主義国同様の株式制企業への転換などを実現し、一定の成果を収めることができた。

- (17) 孫根志華, 2017, 「中国国有企業の改革 (1980~2010年)」『城西国際大学紀要』25 (2), 1-17 頁
- (18) 陳卓君, 2018, 「0~3歳の保育における中国と日本の比較研究—乳幼児保育の機関から見えてきたもの—」『授業実践開発研究』2018 (11), 69 頁
- (19) 関井友子, 斧出節子, 松田智子, 山根真理. 「働く母親の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」『家族社会学研究』1991 (3), 72-84 頁
- (20) 『蕪湖統計年鑑』(2017年版)によると、蕪湖市の農村部在住者の年平均収入は18,830元であり、都市部在住者の年平均収入は35,175元である。一方、中国国家统计局が公布した『2018年居民收入和消費支出状況』によると、2018年時点では、農村部在住者の年平均収入は13,066元であり、都市部在住者の年平均収入は36,413元である。そこで、蕪湖市の経済発展水準は中国の平均レベルであると考えられる。
- (21) 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子, 2007, 「アジアの家族とジェンダーを見る視点—理論と方法」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編著『アジアの家族とジェンダー』勁草書房, 16-17 頁
- (22) 中国の伝統的な教材である。基本的な儒教道徳を韻文形式で記したものである。